

野の花に寄せて

森田 美和子

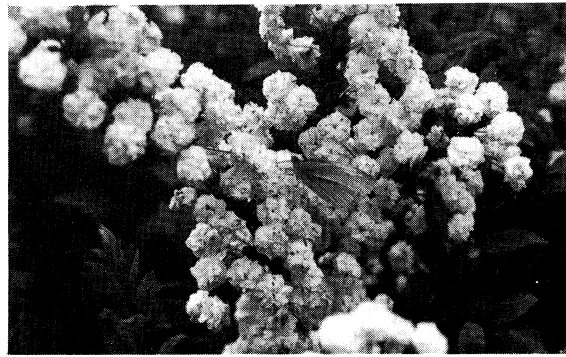


自宅から学校まで、私の通勤時間は十五分ほど。田畑の広がる山ぎわの道
を走りながら、そのわずかの時間に、
「季節」を楽しむことができる。

黄色いタンポポが緑の雑草の中に、
ひときは美しい春。
背丈の高い月見草が朝露をおび、咲
く夏。

ススキが揺れ、紅葉が鮮やかな秋、
思わず車を止めて、ひと枝折って、教
室に飾ることも何度かあった。

もう奥会津は、あんなに美しかった
紅葉も色あせ、「雪」を待つばかりと
なっているのに路傍に目をやると、タ
ンポポがふんわりとわた毛をつけ、月
見草が、冷たい風の中で咲き、アカツ
メグサがぼつんと咲いている。「遅れ
ばせながら」ひっそりと遠慮がちに
咲いている。そんな野の花に、とても
心魅かれるのである。



美しき野の花にチョウが舞う

三年ぶりに学級担任となり、中学二
年生二十九人を相手にスタートした四
月。しばらくぶりの担任に、戸惑いと
不安の中で、自分自身に、「焦るな、
焦るな」といいきかせた。たとえ小さ
な学級集団でも、自分の目標とするク
ラスにするためには、まず生徒たち
の気持ちを知り個性を知ることから…と。
「生活ノート」。これは生徒と私を
結ぶたて糸。「班ノート」。これは生
徒同士を結ぶよこ糸。この二本の糸が
うまく絡みあうように、そのために、
叱咤激励して今日までやってきた。

小さなノート一冊に、私は人と人と
を結ぶ大きな力があると信じている。
そしてまた、書くことは、時として、

話すことより人の心を動かす力がある
ことを信じている。小さなノートの中
に親子のやりとりや、生徒の悩みや夢
や個性が見えてくるのである。

部活にかける闘志があふれるH男、
好きな音楽を熱っぽく語るM夫、
凝ってるイラスト入りのS男、T子、
シャレづくりに四苦八苦のN夫、

本の話題に豊富なC子、R子、
家族の様子をユーモラスに書くY男、
プロ野球の結果に一喜一憂するI子、
ちよっぴり批判精神を見せるB夫、
相変わらず、めんどうそうに走り書
きしてくるE男…etc.

「めんどうだ」「書くことなんか
い」という現代っ子たちだからこそ、
敢えて書かせ続けたいという私の執念
にも似た気持ちである。

野の花に、それぞれの咲く季節があ
るように、生徒たちも必ず自分自身の活
躍の舞台を待っていると思う。春に、
夏に、秋に、冬に…たとえ、どんな小
さな事でも活躍の舞台があり、「やれ
ばできる」という成就感を味わってほ
しい。そんな願いをこめて、怒ったり
ほめたり、時には、生徒とともに沈黙
してしまったり、喜びあつたりの毎日
を過ごしている。教室に飾ってある一
枚の絵は、そんな私への戒めでもある。
その「あざみ」の花の絵にこんな言葉が
ある。

「人見るもよし 人見ざるもよし
我は咲く也」

(南郷村立南郷中学校教諭)

子どもと季節感

中山 一夫



現在の大人は、子どものころたいが
い遊び暮れた楽しい思い出をもって
いると思う。私の子どもころは、近所
の異年齢の子どもたちが集まって、秋
は山でくりを拾い、あけびをとり、山
いもほりをして遊びふけていた。遊
びの中で季節を感じ楽しかったことが
思い出される。

季節の移り変わりを、どのように感
じるかは年齢や個人差あるいは、地域
差もあるが、今の子どもたちは、夏
と冬の記憶は鮮明であるが、春と秋は
つかのまの短い記憶にとどまっている
ようである。季節の暦よりも、遠足や
宿泊訓練といった学校行事につなげて
とらえているようである。生活の中
では野菜や果物は、四季を問わず年中出
まわり、季節感はなくなっている。